

## FOCUS – より良い医療の実現に向かって –

総合内科の設置と医師教育・研修の強化で、地方の基幹病院が抱える課題を解決

### 市立福知山市民病院



京都府福知山市 市立福知山市民病院  
研究研修センターセンター長・総合内科医長

川島 篤志 先生

京都府北部の中丹地方に位置する市立福知山市民病院は、総合内科を設置することで各専門科の専門性を発揮し、患者さんに質の高い医療を提供しています。医師教育や研修にも力を入れて“マグネット・ホスピタル”をめざした結果、充実したマンパワーを確保することにつながりました。

## ジェネラリストとスペシャリストの連携

「地方都市の基幹病院がその役割を十分に果たすには、ジェネラリストとスペシャリストの医師が融合することが不可欠である」。こう考える、市立福知山市民病院院長の香川恵造先生の強い思いを軸とし、同院では“チーム医療”“連携”“人材育成”をキーワードに、地域医療を守るための独自の取り組みを行っています。その鍵を握るのが、川島篤志先生が医長を務める総合内科の充実です。同科は2008年に設置され、現在13名の医師が所属しています。診療においては診断学という得意分野を駆使し、多臓器にわたる複数科疾患や特定の専門医が在籍していない領域を一手に引き受け、適切な診断と治療につなげる役割を担っています。「“専門医が専門医らしく働くこと”を当たり前のことと思う病院もあるでしょう。



「信頼される病院」という基本理念の下に、進化し続ける病院をめざしています。

しかし、特に地域医療の現場では、自分の専門以外の領域への対応に追われ、得意分野で力を発揮することが難しいケースも珍しくありません」と川島先生は言います。しかし、幅広く診ることに優れた総合内科医が存在することで、専門医の負担が軽減され、各科の専門性が発揮しやすくなり、質の高い医療の提供につながっています。ジェネラリストとスペシャリストが有機的に連携して日常診療を進めていくことは、地方の病院になればなるほど大切なことです。総合内科を設置することで医師数不足や診療科偏在などの問題を解決しやすくなるため、今後ますます求められていくはずだと川島先生は考えています。「病院内で総合内科医と専門医との尊重関係も重要です。そのためには、当院の香川院長に代表されるようにトップの理解とコントロールが不可欠だと思います」。

## 教育に力を入れ、マンパワーの充実を図る



常に定員以上の専攻医や研修医の応募があり、“教育”という資源でマンパワーが充実することを証明しています。

同院では“教育のあるところに人が集まる”という考え方にに基づき、医師を引き付ける“マグネット・ホスピタル”であるべく、医師教育や研修の分野でも充実を図っています。例えば、地域の急性期病院として1～3次救急まで受け入れている環境下で、各研修医はさまざまな症例について救急から入院、退院に至るまで経験します。知識の定着やフィードバックのために各種カンファレンスや勉強会を開いています。加えて、院外の医師を定期的に招き、研修医をはじめ若手医師や多職種スタッフも参加できる講演会を実施しています。研究研修センターのセンター長でもある川島先生は、「教育を充実させることで若手医師が集まり、人材が豊富になることで症例研究も活発になります。それは、中堅医師にとっても魅力ある病院となります。マンパワーが不足している地方都市の病院こそ、教育に力を入れるべきではないでしょうか」と言います。

他にも、地域の基幹病院でありながら、総合内科を中心に在宅ケアチームを編成している点も大きな特徴です。地方においては患者さんの高齢化が加速し、複数疾患を有する頻回入退院やがん治療などに対し、継続的医療の提供が必要不可欠です。「在宅ケアは診療所の先生だけに頼っては成り立ちません。基幹病院でも各診療所と連携しながら在宅ケアに目を向ける必要があります、その役割を担うのも総合内科医であると考えています」。総合内科を中心とした同院のこうした取り組みを“福知山モデル”とし、多くの地方都市の中核病院で地域医療の活性化と問題解決に役立ててほしいというのが川島先生の願いです。